

『漢文入門』——私たちは何になぜ入門するのか

横浜国立大学 高芝麻子

(1) 刊行の時期

講談社現代新書版 一九六八年八月一六日 初版

ちくま学芸文庫版 二〇一五年一月二〇日 第一刷

※以下当該書にあたってはちくま学芸文庫版を用いる

(2) コンテンツ

まえがき

くりかえして言うが、「漢文」を宣伝するためでもなく、「漢文」の学力を増進させるためでもなく、ただ「漢文」とはどのようなものかということを明らかにするだけの目的で、私はこの本を書く。これを読んで「漢文」の性質を理解し、意識的にその欠点を補う読み方をしようとする読者があれば、私としては満足である。また、いまの「漢文」は欠点が多すぎるとして別の読み方に進む人があれば、それもまた私の意図から外れたものではない。(六頁)

第一章〈2〉

「漢文」とは中国の古典的な文を、中国語を使わずに、直接日本語として読んだ場合、その文に対してつけられた名称である。(一八頁)

まえがき

1 漢文とは何か

〈1〉「漢文」とは

〈2〉「漢文」の基本的意味

2 漢文と漢語

〈1〉漢字の特色

〈2〉実字・虚字・助字

〈3〉漢語と和語

〈4〉和臭

3 訓読の方法

〈1〉音と訓

〈2〉漢音・呉音・唐宋音

〈3〉送りかな

〈4〉返り点

〈5〉書き下し文

〈6〉句読点

4 訓読の歴史

〈1〉訓点のはじまり

〈2〉カタカナの成立

〈3〉ヲコト点

〈4〉いろいろな返り点法

〈5〉訓読の確立

〈6〉訓点本の流行

〈7〉訓読の改革

5 むすび

むすび

ことによると、遠い将来、日本語の中から漢語や「いわゆる(所謂)」などといった訓読に由来する言葉がすべて消え去り、漢文訓読ができる人を無形文化財に指定するような事態がおこるかもしれない。しかし現在、漢文はわれわれの生活の中に生きている。それを、単に日本文化の伝統のうちにあったものだからという後向き姿勢で護持するのではなく、これからの日本人が中国の古典を理解するための方法として発展的に考えることも必要であろう。この本は、そこまで論及することはできなかったが、漢文訓読の概要を説明することによって問題のいとぐちを提供するものとなり得たならば、幸いである。(二〇二—二〇三頁)

(3)『漢字圏の近代 ことばと国家』

(村田雄二郎／C・ラマル編、東京大学出版会、二〇〇五年)

村田雄二郎「序 漢字圏の言語」

……ことばと国家あるいは民族文化の間には、自然で強固な紐帯が存在しているという考え方も強くある。日本人なら日本語を話すのが当然だし、日本人というのは日本語を話すひとびとの集団なのだ、というように。ここには、特定のことばが特定の集団(国家や民族)の集合意識(アイデンティティ)を構成するという前提がある。

しかし、本書はこうした自明に見える前提を疑うことから始める。(一頁)

では、東アジアにおける言語・文字使用の実態とはいかなるものであったのか。多言語的・混成的な言語状況から、言(話しことば)と文(書きことば)が有機的に結合した自己完結的な言語共同体＝国語という理念への移行はいかにして生じ、その過程でいかなる模索や葛藤があったのか。(一一頁)

(4)齋藤希史『漢文脈の近代日本 もう一つのことばの世界』

(NHKブックス、二〇〇七年)

「終章 漢文脈の地平」

つまり、現代における漢文脈について考えるということは、古典の素養とか、東アジアの共通文化とか、そういうことにとどまらない問題について考えることになるのです。なぜなら、私たちが立っているのは、漢文脈の秩序の外側に開拓された言文一致の領野だからであり、それは、漢文脈的でないものを目指して開拓されたはずだからです。極端に言えば、漢文脈とは、いったんは捨てたはずのものです。そうであるならば、なぜ捨てたのか、それを捨てた私たちとは何であったのか、目を向けないわけにはいきません。(二二三—二二四頁)

あとがき

この本は、今の私たちのことばは、漢文からの離脱、あるいは漢文への反動としてできたものだ、という立場をとっている。だからこそ、漢文の世界を断片ではなく全体として捉えることに腐心した。漢文脈と近代日本語のあいだの連続面ではなく不連続面を重視したのは、それが漢文脈の世界をもう一つのことばの世界として浮かびあがらせる方法だと信じたからである。迂遠ではあるけれども、こうした作業こそが、今の私たちのことばを功罪を含めて考えることにつながるのだと思う。

現代にとって重要だからでも有用だからでもなく、現代とは異なる一つの世界をなしているというただそれだけの理由で、学ぶ意味はある。まして、私たちが脱ぎ捨ててきたことばの世界であれば、なおさらである。この本の主張を一つだけ言うとするなら、そういうことになるのかもしれない。(二三四頁)

(5)『「訓読」論 東アジア漢文世界と日本語』

(中村春作／市來津由彦／田尻祐一郎／前田勉共編、勉誠出版、二〇〇八年)

中村春作「なぜ、いま「訓読」論か」

その(引用者注:自らの文化の歴史的形成過程への内省を私たちの求めるものという)意味で、「訓読」の問題は、まさしく思想的な論点として在る。そこには、近世以降の、私たちにおける「古典」意識や、「日本文化」にとっての「他者」像のありかたが深く関係している。「訓読」(および「訓読」に対する意識)の問題は、異文化受容の一般的問題に止まらず、私たちの「日本語」や「日本文化」の自覚がいかなされたかという問題、近世以前の中国受容と近代以降の中国学との間にある連続と断絶のありよう(そこへの専門的研究者の自覚のありよう)に直接関わる問題なのだ。(四―五頁)

「訓読」を論じることは、近世から近代にいたる日本文化の実相を「近代国家」の枠組みを外して、あらためて浮き彫りにすることのみにとどまるのではない。それは、東アジア漢文文化圏の多様な成立の在り方を解きほぐすための、一つの手がかりとして考えられる可能性も出てくるだろう。(一一頁)

(6)前野直彬『精講 漢文』(ちくま学芸文庫、二〇二四年、初版は学生社より一九六六年刊)
堀川貴司「解説」 ※ちくま学芸文庫版書き下ろし

この二点をまとめて言えば、漢文は中国という巨大な文化圏を知るための鏡であり、その鏡にはわれわれ自身も映っている——つまり漢文は、中国文化と切り離せない日本文化のあり方を知るための手段であり題材でもあるから、というのが答えになろう。(六四九―六五〇頁)